

6年間をふりかえって

安井 円香

2018年3月学部卒

2020年3月修士修了

皆様、いかがお過ごしでしょうか。ご指名いただき身に余る思いですが、私なりに数学と過ごした毎日を書きとめてみます。感染症対策で学位記授与式と懇親会が中止となり、その後なかなか集まる機会を設けることも難しい状況が続いています。それぞれの生活の中でこの文章が手元に届いた際に、どこか懐かしく感じていただける部分があれば幸いです。

さて、理学部・理学研究科での6年間を「数学との思い出」という軸で振り返ると、私には特に3つのが思い出されます。

1つ目は、3回生で受講した「演義」です。系登録してすぐの時期に演義を受講することで、数学と向き合う姿勢を教わったように思います。前期の演習クラスは、月曜の解析学、火曜の代数学、水曜の幾何学を受講しました。毎日のように理学部図書室に寄り、文献にあたってはお昼寝をしていました。演習問題を解くために参考となる文献を見つけると、詳細は他の文献にあるため割愛との記述があり、誘導されるがままにその文献を探すとその文献でも割愛されていた、と振り回されたこと。理解した「つもり」で黒板発表に臨んだがために解散を19時まで長引かせてしまったこと。様々な場面が思い出されます。夢中になって問題に取り組んだ時間はもちろんのこと、19時までお付き合いいただいた奇数組のご厚意も忘れません。

後期には「講読クラス」で木上淳先生にお世話になりました。前期の演習クラスでお伺いした、先生の「数学に『思います』はないねん」というお言葉が大変印象に残っており、以降証明を書く際には、思い込みに頼って記述していないか、自問自答するようになりました（が、至らぬ点ばかりであったことは十分承知しております）。私にとって初めてのセミナー形式での講義でしたが、発表ではテキストを数十か所訂正したこともあり、講読の洗礼を受けました。途中、力不足でご迷惑をおかけしてしまうことが申し訳なく、履修取消が何度も頭を過りました。しかし、どうしてもわからないままで発表を迎えて謝るしかなくなったとき、「数学に『ごめんなさい』はないねん」と議論を導いてくださる先生の優しさに救っていただき、なんとか期末まで乗り越えられました。また、講読クラスでのつながりは3回生後期で終わらず、学部卒業後の進路の悩みを打ち明けることができたり、大学院入学後に自主ゼミを土曜日に開催したりする仲になりました。

2つ目は、4回生での「卒業講究」です。福島竜輝先生のもとで、確率論のテキストを講読しました。テキスト選択の際には、せっかく先生のご指導を享受しながら1

年間腰を据えて講読するのだから、成長のためにも負荷が必要だと意気込み、少しだけ背伸びしたつもりでした。しかし、1年間の講読を振り返った素直な感想として、少なくとも私一人ではどんなにはしごを登って背伸びしても届かないテキストでありました。にもかかわらず、3回生の夏から始めた就職活動を断ち切る勇気もなく、そのうえ大学院入試を2つ受験し、夏には教育実習のため京都を離れる、という優柔不断な日々を過ごしたうえ、学部入学時からの趣味である文系科目的レポートにも懲りずに取り組み続けてしまいました。全力を傾けても太刀打ちできないテキストを相手にしているのに、他のことにも時間を割く、なんともわがままな1年間を送ったものです。発表では、前日深夜（当日早朝？）まで準備しても、毎回どこかしら議論が破綻していたように記憶していますが、修正が出来ずに黒板の前で固まる私を見放すことなく共に打開策を探してくださる温かなセミナーでした。躊躇たびに知識・技術面でのご指導と多大なるお心遣いを頂き、ありがたさと申し訳なさで一杯です。そして、テキストの解説に加えて、一般的なテキストではどのような手法で証明されるのか、大学院での専攻にどのようにつながるのか、など福島先生からお伺いするうちに、もっと深く確率論と関わりたいと願うようになりました。

ところで、就職先の内々定の際に全員が聞かれた質問があります。「これまでを振り返って、大切な映画や音楽、本を一つ挙げてください」。感動した作品の一つでも答えるのが相場だと思いつつも、私の頭には卒業講究のテキストしか思い浮かびませんでした。もちろん、厚くて重くて青いこのテキストを1年間欠かさずかばんに忍ばせていましたが、学部卒業後の進路を決断するうえでかかせない出会いであったためであります。このテキストを乗り越えた先には何があるのだろう、今は記述内容を解説することで精一杯だがここで得た概念を使うとどんな議論ができるようになるのだろう、そんな好奇心がどうしても捨てられず就職活動をやめて大学院進学を希望することにしました。

3つ目は修士論文です。運よく希望どおり日野正訓先生のセミナーに配属していただき、フラクタル上の確率解析に携わることができました。前述のとおり悩んだ末の大学院進学であり、せっかく就職する前に2年間を手に入れたのだから、一つのことにつか込む経験をしよう、と密かに進学時から決めていました。このため、特に就職活動を終えてからは、趣味の他研究科レポートの誘惑を断ち切り、持てる時間を修士論文に捧げる毎日が始まりました。（他のことにも費やしていたように見えていたかもしれません、私の中ではおそらく前にも後にも最も集中して取り組んだ経験になります。）修士論文に取り組んだ日々を振り返ると、数学に不得意意識を長く抱いている私にとっては、もったいないくらいに恵まれた環境でした。計算機室で検索すると読みみたい論文が容易に手に入り、気になる文献は数学教室かRIMSの図書室に足を運べば大概手に入れます。行き詰ったときには、無駄話に付き合ってくれたり、論点の整理を手伝って（さらには、ときに重要な示唆を与えて）くれたりとたくさん助けてくれる学友にも恵まれました。研究集会や集中講義に気軽に立ち寄って刺激を受けることもできます。なにより日野先生には、論文の問題設定、先行研究の調査、論文執筆、発表、全てにおいてお世話をになりました。尊敬に感謝に、貧相な語彙力では気持ちを

言い表せません。

こうして3つのことを中心に振り返ってみると、6年間の「数学との思い出」とは、数学が得意ではない私にも辛抱強くご指導くださった先生、学友に恵まれた日々であることに改めて気付かされます。皆様に懐かしく感じていただければ、と豪語して書き始めましたが、数学が不得意な学生・院生の目線で書いた文章なので、ご期待に添えていないようにも思料いたします。しかしこのよう気に気持ちを伝える機会もめったにならないため、お許し願いたく存じます。雑駁な文章に最後までお目通しいただき感謝いたしますとともに、皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。いつかまた京都でお目にかかる日が来ると信じて。

